



アルビル・バハルカ難民キャンプ (2014 年 7 月 13 日 撮影: 村田信一)

NEWS

イラクはいま、どうなっているのか

佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長)P.1

「イラク戦争と子ども絵画展」開催P.3

イラクから 2 人のゲストが来日

「世代を超えて戦争を語るツアー」開催P.3

シリア難民妊産婦支援プロジェクト報告

榎本彰子・国井真波・田村佳子P.4

演劇「やわらかい服を着て」

出演者インタビューP.6

夏期インターンを終えて 青山利恵子P.7

鎌田代表のつぶやき「1%の力」P.8

写真集『ARAB』世界同時出版

写真家・吉竹めぐみさんP.8

イラクはいま、どうなっているのか

JIM-NET 事務局長 佐藤真紀の緊急現地レポート

ーイラクが崩壊ー

もう、シリアとか、イラクとか言っている場合ではない。「イスラム国」からの避難民をどう助けるかだ。学校や建設中のビルに避難してきた人々は、すべてを失い、恐怖におびえ、渇きと飢えに苦しんでいる。つい数日前までは、レイプであり、首を切られる恐怖におののいていた彼らは、人間性を否定された哀しみに満ちたまなざしで私を見つめる。その瞳に映る自分の姿は、まさに、イラクを「こんな状態」にしてしまった国際社会そのものの傲慢さだろう。

【戦時下のクルディスタン】

6 月 10 日、いきなりモスルが、「イスラム国」の手に落ちた。JIM-NET が活動拠点としているアルビルにも避難民があふれ、クルド自治政府は、NGO を招聘し緊急会議を開催し、支援を呼びかけた。JIM-NET も、避難してきたキリスト教徒の家族を事務所に泊めるなどで対応。モスルからナナカリー病院にたどり着いた小児がんの子どもたちには、ウエルカムキットとして、タオルや歯ブラシ、おむつ、下着類などを配る。お菓子も。7 月には、榎本、田村日本人駐在スタッフ全員を帰国させた後、私 (佐藤) と、村田信一 (写真家で元 JIM-NET スタッフ) が、アルビルとアンバールの難民キャン

プを視察し、医薬品の支援などを行ったが、キャンプの劣悪な環境にただ驚くばかりだった。

一旦は、クルド自治政府の軍隊「ペシュメルガ」が、交戦して、イスラム国を撃退したが、8 月 6 日には、ペシュメルガも 100 人以上が殺されてしまい モスル周辺の、キリスト教徒の町、カラクーシュと、ヤジッド教徒の村々が完全に「イスラム国」の手に落ちてしまったのだ。そして、オバマ大統領も重たい腰を上げて空爆に踏み切り制空権を確保しての、支援物資の投下を行った。クルド自治区はシリア難民 20 万人に、イラクからの国内避難民 70 万人を抱え込むことになってしまった。

【民族浄化におびえるキリスト教徒たち】

私は、いったん帰国し、再び 8 月 20 日ー 28 日までの約一週間アルビル入りした。

アルビルには、アンカフという小さなキリスト教地区があるが、避難民でごった返している。教会の敷地内に設営されたテントや、立てかけのビルや学校が避難所になっている。親戚に身を寄せて、その日その日を、乗り切っている人たち。日中は 45℃を超える暑さ。夜になっても、さほど気温は下がらない。2 週間目に入り、避難民たちもかなりイライラし

JIM-NET のホームページアドレスが 9 月 1 日から変更になりました! (旧サイトから自動的に飛びます)

新しい URL <http://jim-net.org/>

ている。教会に支援金を渡したり、先に現地入りしていた高遠菜穂子さんから引き継いだ腎臓結石で痛がっていたファディ君の手術費を工面したりした。

【死んでいくアーサー君】

教会の前には野戦病院のテントが出来ており、カラクーシュから避難してきた脳腫瘍の男の子が横たわっていた。アーサー君 11 歳だ。一年前に手術をした後は普通に学校に通っていたという。ところが 6 月、「イスラム国」とペシュメルガの間で戦闘が始まると、アーサー君は爆発音や銃声におびえ、体調がどんどん悪くなり、痛みで立てなくなってしまった。

8 月 5 日、アルビルで CT を取った。800 ドル払わなければならなかった。カラクーシュに戻ると、翌日には、「イスラム国」が攻めてくるので、ペシュメルガが撤退するというのだ。あわてて、一家は、おじいさんの家まで避難した。しかし、すでにペシュメルガが撤退を始めており、車を見つめることができず、孤立してしまった。親せきが、キリスト教の民兵に連絡をして、車を回してくれた。すでに夜の 10 時を過ぎていた。家族 13 人が 2 トン積みのトラックの荷台に乗り込んだ。アーサー君は痛がって泣いていた。そして、カラクーシュを出発した。途中、最後まで残っていたペシュメルガの車が自分たちのトラックを追い抜いて行った。

朝方 2:30 に、ハザルというアルビルに入る検問所で止められ、車は中に入れないというので、一夜を明かす。そして翌朝 10 時に、お父さんはアーサー君を担いで 1km 歩き、アルビル行きのバスに乗り込んだ。家族で膝にマットレスをのせて、その上にアーサー君を横たえた。アルビルにつくと、すぐに病院に連れて行っただが、がんが全身に転移しており、もうどうしようもないといわれた。4 日間入院したが、家族と一緒にいたほうがいいだろうと、教会の避難所に戻ってきた。しかし、テントもない状況だったので、近所の人がアーサー君を家に入れて休ませてくれた。しかし、いつ死んでもおかしくない状態になり、これ以上面倒を見るのをいやがった。数日前に、避難所に野戦病院のテントができたので、アー



(写真・アーサー君とお父さん 撮影：佐藤真紀)

サー君は、そこで寝ている。私は、痛み止めなど必要な薬を買うように 100 ドルを渡しておいた。アーサー君は 2 日間意識がないという。

【ヤジッド教徒】

日本でも結構報道されたのが、シンジャール山に逃げたヤジッド教徒たちだ。彼らはゾロアスター教に近い。多くは、

ザホーやドホークに避難している。建築中のビルや学校などいたるところに避難しており、12 万人を超えているという。まずこの数に驚く。焼け石に水と揶揄されようが、とにかくこの暑さ、水を持っていくくらいしか手がなかった。国連は、大規模な支援を開始するという。しかし、8 月の終わりで支援が殆ど届かないところも多く、水を持っていっただけでも私たちはまるで英雄のように扱ってもらえた。

【がんの子ども達】

もともとシンジャールから通っていたがんの子ども達は、家を失ってしまった。ナブラスちゃん 11 歳は、白血病だ。「イスラム国」の攻撃から逃れ、シンジャール山に入った。

水もほとんどない。数滴の水を、毎日もらって過ごしたとう。8 日間山の中にいてシリア側に保護されて、ドホークに逃げてきた。ドホークにも小児がんの病院があるが、技術レベルは低く、通院での投薬しかやってくれないという。医者に聞くと、20 名が新たにシンジャールなどから避難し、難民キャンプや、親戚に身を寄せながら、病院に通っているという。JIM-NET は緊急として彼らの生活支援と病院への薬の支援を約束した。

日本政府は 6 月 27 日には、国連機関へ 600 万ドルの支援を発表した。間もなくそれらが使われるだろう。日本の NGO も政府資金でいくつか新たにイラクに参入してくるそうであるが、まだ時間がかかりそうだ。一方で気になるのは、日本の国益だとしてイラク戦争を許してしまい、ここまでめっちゃくちゃになってしまっても、皆が無関心だったことだ。そういう無責任な日本にしてしまったのは、われわれ NGO の怠慢だといわれてもしかたがない。JIM-NET にとっても、9-10 月は、厳しい戦いになる。

JIM-NET の緊急支援 6月—8月までの実績

- がん患者への現金支援 1000 ドル ウェルカムキット (10 人分) 100 ドル
 - 小児がん医薬品支援 2000 ドル
 - アンカワキリスト教徒避難民へ支援 1200 ドル
手術代支援 1600 ドル
 - ドホークヤジッド教徒避難民へ水、食糧支援 563 ドル
 - ルーピア地区への避難民に水とおむつ 75 パック 500 ドル
 - イラク・ヨルダン国境に逃れてきたアンバール避難民に、2513 ドルの医薬品支援
- 合計 100 万円の支援を実施

今後の支援予定 (9月—10月)

- ドホークの小児がん病院へ 医薬品代 5000 ドル
- ドホークのシンジャールの難民患者へ 2000 ドルの経済支援
- 避難民へ食糧など必需品 1000 ドル
- アルビル・ナナカリー病院などへ追加医薬品 2000 ドル

緊急支援プロジェクト募金にご協力をお願いします！

郵便振込口座 00540-2-94945 日本イラク医療ネット

「イラク戦争と子ども絵画展」 開催 (8月9日～14日) @B-gallery(ikebukuro)

左からイラク大使館書記官 Ahmed Ghanim さん、ウード奏者 Sophian さん、B-gallery 代表・長はるこさん、佐藤真紀 JIM-NET 事務局長 (8月9日オープニング)



8月9日から14日まで、池袋のB-galleryにて「イラク戦争と子ども絵画展」を開催しました。谷川俊太郎さんの絵本『おにいちゃん、死んじゃった』(教育画劇刊：2004年2月)に使用されたイラクの子どもたちの描いた原画、今も苦しんでいる小児がんの子どもたちの絵、シリア難民の子どもたちの絵、現地の写真を展示。8月9日にはオープニングパーティ、10日には「羊ぐるぐるワークショップ」(羊毛フェルト手芸 講師：佐藤百子先生)を開催しました。

「イラク戦争と子ども絵画展」を開催して B-gallery 代表：長はるこ

例えば今年5月のスケジュールに急なキャンセルがあり、急遽ヨルダン3人展を開催することになりました。オープニングパーティーにヨルダン大使ご夫妻が来場、イラク大使館職員ソフィアンさんのアラブの楽器ウード演奏、そしてJIM-NET代表の佐藤真紀さんと知り合うことが出来て、遠い中東が一気に近くなりました。アラブ大使夫人のチャリティバザーにも出かけ、ついに10月はドバイのアートフェアにも出展予定です！偶然チョコ募金もしていたし、イラクの子どもたちの絵画を展示したいと思っていた矢先、ちょうど8月前半に少し隙間が出来たので、原爆投下や終戦記念日も近いということで「イラク戦争と子ども絵画展」のタイトルで開催することになりました。



時節柄、新聞各紙に掲載され、たった6日間と短い期間、しかも真夏の暑い時にもかかわらず、ギャラリー奥のスタジオ・バルの生徒を始め、沢山のお客様に来廊いただき、そしてJIM-NETの楽しい皆様と親しくさせて頂きまして、大変有意義な展示でした。またフェルトのワークショップでは、羊毛を洗って

固めるとばかり思っていたのが、ひたすらクッキー型の中でチクチク刺すだけ！で成形されることに目からうろこの衝撃でした。B-galleryの頭文字Bをマルチカラーで作り、携帯ストラップとして愛用しております。(写真右：ワークショップ。講師は佐藤百子先生)



なぜ、この世から戦争がなくなるのだろうか？谷川俊太郎さんの絵本「おにいちゃん、死んじゃった」の最終行に「まず自分の心の中で戦争をなくすこと、ぼくはそこから始めたいと思う」とあり、全く同感です。私自身も忘れがちな気持ちに気付かせて頂いたことに感謝いたします。地球から無意味な戦争が無くなる様に願いをこめて、もっと多くの人にも見ていただきたく、別の切り口で次の機会もぜひ開催希望です。今後共宜しくお願い申し上げます。取り急ぎ御礼まで。

イラクから2人のゲストが来日「世代を超えて戦争を語るツアー」開催 (10～11月)

JIM-NETでは、イラクから若者+シニア世代を招聘。世代を超えて戦争を語るツアーを行います。10月25日—11月15日の滞在を予定。招聘の費用のカンパをお願いします。また、地方巡業など、希望される方は是非ご連絡ください。

◆ムスタファ・イマッド (20歳)

バグダッド出身。8歳の時に、イラク戦争を体験。疎開先で米軍のヘリコプターの攻撃を受け、足を負傷。ジャーナリストの土井敏邦氏が取材し、ニュース・ステーションで取り上げられると、反響を呼び募金が集まりヨルダンで手術を受けることができました。子どもが体験した



戦争に迫り、若者同士の交流を行います。

◆アブ・サイード (61歳)

バグダッド出身のパレスチナ人。一族はハイファ出身。若いころは、パレスチナ抵抗運動に参加したことも。2004年から、JIM-NETに協力し、スタッフとして小児がんの患者の面倒を見ている。バグダッドのパレスチナ難民はイラク戦争後の迫害が激しく、多くは国を去っていきました。バグダッドに残って支援活動続けるサイードがパレスチナ人の苦悩を語ります。



【JIM-NET10周年イベントに登場！】

11月8日(土) 立教大学 12号館地下1階会議室 (池袋西口)

●シリア難民妊産婦支援プロジェクト報告●

シリア難民妊産婦支援で取り組んだこと

榎本彰子（JIM-NET 海外プロジェクト担当）



寒い冬の1月から始まったシリア難民キャンプでの妊産婦支援が、ラマダン前の暑い6月末に一区切りを迎えました。

病院やクリニックがある都市からは1時間弱かかり、周りに平原が広がる、陸の孤島のダラシャ克蘭キャンプ。当初、キャンプ内には産婦人科医がおらず、妊婦健診のための医療機器（エコー等）もなく、妊産婦さんを十分にケアできる体制が整っていませんでした。また公共交通機関がなく、妊婦健診を受けるなら自ら交通費を負担して都市まで行く必要がありました。定期的に健診を受けることは母子の健康維持や異常の早期発見に繋がりますが、難民生活の中では健診費用を捻出するのが難しい状況です。

今回のシリア難民妊産婦支援は、①キャンプと病院を繋ぐバスの運営、②病院やキャンプへ医療機器の提供、③妊産婦への情報提供のために母子保健に関するパンフレットの作成、④妊産婦の必要物資の配布、⑤日本から専門家を派遣しセミナーを実施しました。また、緊急的な新生児の医療費補助や必要物資配布と、妊産婦さん向けの「心のケア・ワークショップ」を実施しました。

6月末までに約250人の妊婦さんが、医療バスを利用して妊婦健診を受けることができました。また、プロジェクト開始時に、同じアルビル県内にあるカワルゴスク難民キャンプに産婦人科医が赴任したため、病院へ提供したエコーの一つを同キャンプ内のクリニックに移設し、健診が行えるようにしました。エコー設置により、期間内に延べ約1200人の妊産婦さんや婦人科疾患を抱える女性が健診を受けられました。また、エコーでの健診により、毎月約1割の妊産婦の早期異常（子宮外妊娠、前置胎盤、切迫早産等）が発見され、救急搬送されました。必要物資として、産婦に産後出血用パッドと新生児おむつを配りました。おむつのニーズは限りなく、追加で配布することにしました。

6月末にはダラシャ克蘭難民キャンプにもエコーを入れて、医師が派遣され健診が行われることで、JIM-NETのキャンプ内での妊産婦支援は完了する予定でした。しかし、6月上旬からのイラク国内の騒乱により、クルド自治区にもたくさんの国内避難民が逃れてきて、自治政府や支援団体がその対応にも追われ、医者が派遣されないままの状況になりました。また、7月は暑い日が続いたので、体調を崩す人が多く、急遽医療バスを再開させました。現在は、期限付きでJIM-NETが現地医師の派遣をサポートしています。現地保健省が継続的に医師を派遣でき、ダラシャ克蘭難民キャンプ内

で妊婦健診が行えるようになるまで、支援する予定です。

今回の支援期間中に、たくさんの赤ちゃんに出会えました。しかし、彼らは生まれた時から難民。早く彼らが難民でなくなり、自分たちの帰りたい場所に帰れるよう、日本も含めた国際社会がもっと働きかけていくべきではないでしょうか。

ママと赤ちゃんのダラシャ克蘭難民キャンプ －専門家派遣の立場から－

国井真波（看護師）



約7000人以上のクルド系シリア人が生活をする、ダラシャ克蘭難民キャンプ。ここには現在約250人の妊婦がおり、日に日に妊婦も新生児も増えていきます。JIM-NETの活動

の長期目標は、「母子ともに安全安楽な分娩」であり、それを達成するために6つの短期目標を設定しました。その中で私が主に関わったのが、「妊産婦への情報提供」と「家族計画」です。具体的に妊産婦への情報提供とは、『妊娠期の過ごし方』という冊子を作成することでした。日本の母子手帳の「情報提供」の部分参考に、シリア難民妊産婦という立場に適切な内容に変更しました。それを、日本語→英語→アラビア語の順に翻訳して1000部作成しました。実際には妊娠期の情報だけでなく、産後の過ごし方や母乳ケアについても簡単に掲載しました。ダラシャ克蘭難民キャンプ内の看



冊子『妊娠期の過ごし方』を手にニコリ！



テントの中でセミナーを開催。

護師に冊子を渡し、妊娠が分かった女性に必ず配布するようにしています。冊子を受け取った女性たちに、その使い勝手を確認したところ、全員が「冊子を読んだ」と言っており、特に「妊婦の食事」「妊婦の運動」「産後の体の変化」が勉強になったと挙げていました。

そして、ここで言う「家族計画」とは、避妊についてです。母国が紛争状態に陥り、今後の予測が立たず、経済的に困難な状況ではこれ以上の妊娠を望まない女性が多いです。そして夫も子どもを望んでいないにも関わらず、適切な避妊が行えていないことで妊娠し、中絶を考えたり、産後にネグレクトをしてしまう親が存在します。そのため、難民キャンプ内の看護師から「避妊のセミナーを開催して欲しい」とリクエストが挙がり、50人規模の大きなセミナーから10人前後のミニセミナーまで、内容を少しずつ変えながら複数回開催しました。セミナーの前後にはプレポ



キナさんと赤ちゃん

ストのアンケートを実施し、実際にどのくらい理解したのかを確認しました。その結果、どのセミナーでも9割以上の女性から、「適切な避妊方法を理解した」「月経周期を理解した」「子どもをいつ何人産むか決める権利が女性にあることを理解した」という回答が得られました。

課題も残されました。家族計画に関しては、男性の協力が不可欠です。男性向けの避妊セミナーは男性が実施することがベストですが、適任者が見つからないため現在まで実施できずにいます。ダラシャ克蘭難民キャンプには、ビル・コンドーム・IUD・避妊注射など、さまざまな避妊ツールが揃っていますが、クリニックにそれらがあることを知らない女性が多く、また今まで使ったことのない女性が多かったです。男性への避妊教育が実施できるまでの間は、女性への避妊教育をしっかりと実施し、可能な限り女性側で避妊ができるようにしていく必要があると思いました。

また、10代の若い女性への避妊教育も必要と考え、複数回のセミナーを実施しました。難民キャンプ内でセミナーの告知をする時に「避妊セミナー」だと言ってしまうと保護者が参加させないため、「健康セミナー」として未婚の女性たちを集めて開催しました。しかし回を重ねるごとに参加人数が少なくなり、キャンプ内の看護師から「未婚の女性を集めるのが難しい」と言われ、途中で開催を打ち切ることになりました。文化的に性をオープンに語るのは難しく、彼女たちを尊重しながら避妊教育を継続するのであれば、違う形を模索する必要があると思いました。

外務省からの資金提供で実施したシリア難民妊産婦支援は、今年の6月で終了しました。今後年内は、JIM-NETの自己資金で継続します。現在特に問題になっているのは、妊

婦健診がスムーズに行えていないことと、JIM-NETが供与したエコーが効果的に使用できていないということです。エコーの使用を上手に妊婦健診と絡めて、質の良い妊婦健診が継続して実施できるように、年内までに問題解決したいと思っています。

妊産婦支援プロジェクトを終えて



田村佳子（看護師）

約3ヶ月間のシリア難民妊産婦支援プロジェクトのコーディネーター業務を終え、帰国してはや2ヶ月が過ぎました。シマーフ、ラウジャン、シェイリーン、ナルミン、ローシム、キナ…今でも関わらせて頂いた妊産婦さんや赤ちゃんたちの顔が思い浮かびます。彼女らは先の見えぬまま、現在も不安定なイラク国内での難民生活を送っています。

任期中は、『妊産婦さんの傍でサポートをするということ』を一番に考えて活動を行いました。私は日本では訪問看護師として在宅医療に関わっていますが、不安を抱えて暮らす人々に『傍で支えていく』という姿勢を見せて関わり続けることは、日本でもイラクでも同じだと感じました。例えば、試行錯誤して完成した妊産期の過ごし方をまとめたパンフレットは、食事と産後の避妊の頁が役立ったとの声が多く聞かれました。今後も情報量の少ない難民キャンプの中での『たまごクラブ』のような存在として、このパンフレットがお母さんからお母さんへ引き継いでもらえる事を願います。テントへの家庭訪問では、出産当初はややネグレクト気味だったお母さんが、私たちが何度も家庭訪問を続けることで子育てに積極的になったり、子供はこれ以上欲しくないと考えてい



低体重だったシマーフちゃん

るが避妊方法がわからないお母さんに、避妊方法を指導したり…とテントを家庭訪問したからこそ知り得た情報や関わりも数多くありました。私たちがができることは限られているかもしれませんが、こちらの精一杯の想いや関わりが妊産婦さんたちに伝わり、母親が安心して出産、子育てができる環境につながったと考えられます。

シリアの人々にとって、このような難民生活がいつまで続くかは誰もわかりません。でも、どのお母さんも、いつか訪れるであろうシリアに再び戻れる日を待ち望みながら、精一杯生きていました。このプロジェクトを通して強く美しく生きるシリアの妊産婦さんたちと関われる事ができて、私も彼女らから多くの事を学びました。一日も早いシリアの平和を願って止みません。

演劇「やわらかい服を着て」 ～国際支援 NGO で働く若者の群像劇～

7月10日から13日まで、演劇「やわらかい服を着て」が東京・上落合にある劇場「TACCS1179」にて上演されました。同作品は、JIM-NETの活動をモデルに劇作家の永井愛さんが書き下ろし、2006年5月に初演されたものです。

物語は2003年、イラク戦争開戦前夜から2006年までのNGO「ピース・ウィンカー」の活動を追います。自衛隊イラク撤退、人質問題と自己責任、劣化ウラン弾やクラスター爆弾の被害などの問題を織り込みながら、若いNGOスタッフの意気込み、焦燥、挫折、再生などの心の軌跡が実にリアルに描かれています。

今年「UMAN プロデュース」による再演が決まってから、JIM-NET事務所にキャストの皆さんが来られ、佐藤事務局長が2003年当時から現在までの状況をレクチャーしました。若い役者さんたちがイラク戦争当時のNGOの活動をどう演じ、どう変わったか。現在の心境をインタビューしました。2回に分けて掲載します。
(2014年9月2日：インタビューアー 崔麻里・竹内弥生)



きたい」とか思っちゃう。それを止める役っていうのは、なんか…自分だったらそっちに動いてしまうんだろうなって。

——お芝居に入っていく中で楽しめた部分ってありますか。

山口：楽しくなかった（笑）。今となっては、本当に体験できて一番財産だなんて思っているんですけど。

八敷：苦しかったけど楽しかったね。こういう発散するような役というのは普段ばくに振られないので。

山口：かつさん（純也）が新子（気丈なヒロイン）と揉めて。内に内に入っていくかつさんは、だいぶこういう人なんだなと思ったりしました。

——佐藤真紀（JIM-NET事務局長）の第一印象は？

八敷：壁がない人。いろんなところに行って、いろんな人と会っているから、すぐに（心を）開けるんじゃないのかなって感じました。一番すごいと思ったのが行動力。熱意もそうですし、本気で行くからみんなが集まってくるのかな、って。

山口：ちょっとあのとぼけたというか（笑）周りがしてあげなきゃという感じ。問題点を不思議と見つけてくださって。3回ぐらいJIM-NETに行って、じゃこの人と会ってみますか、この映像見てみますか、みたいな…。いろんな子どもとも接しているから、自然にぱっと見つけられるのかもしれない。それはすごい心地いい。少年だなんて思いました（笑）。そんな佐藤さんが、「本当めげそうになる」みたいなことをおっしゃっていたとき、ショックでした。でも素直だなんて。

——この劇は佐藤にとっても確認作業だったと思います。

八敷：続けるのは難しいですよ。役者もですけど、続けることが一番大変。なかなかお給料も稼げるわけでもないんで。

山口：周りの人のおかげだなとは思っています。

——印象に残ったシーンとかセリフはありますか。

山口：社長（事務所の家主・城島）とのやり取りですね。立て看板つくって揉めていくところの。一平とも決別っていうか、「あなただけの団体じゃない」っていうところに至るまでがすごく辛かったです。

八敷：このお芝居は、悪者がいないというか全員が正義を貫いているから、そこがおもしろいところだっていうのがある

【Part1】

八敷 勝さん（大槻純也役・写真右）難民キャンプへ支援に。

山口沙貴さん（佐野千秋役・写真左）冷静な実務家。



——この劇に出演する前とあとで、NGO活動に対する見方に変化はありましたか？

八敷：出演する前は、イラクのことに関しても、ニュースで流れても「大変だなー」というぐらいにしか思わなかったんです。お芝居に関わって、がらっと変わりました。最近は食い入るように見てしまっ

山口：私は、海外のニュースチャンネルをまとめてBSで放送しているのを稽古の途中に見つけて、ずっと録画していました。知らなかった自分にもショックを受けて。

——役が決まってから本番までの期間は？

八敷：2週間ですね。最初台本を見たとき、この題材とセリフ量とこの期間でちょっとこれは…やばいと思いました。

——役作りでどんな苦労がありましたか？

山口：稽古のはじめのほう、みんなで机と椅子並べてNGO会議しようって…。簡単にお芝居やっちゃいけないと思って。

八敷：特にこういうフィクションでなく、事実であるものに対しては、神経を遣いましたね。前に自分の劇団でも沖縄・戦争の芝居をしたんですけど、それを広島に持っていったんですよ。正直ドキドキしていたんですけど…。でも見ていただいた方には「素晴らしい」と言っていたらいい。

——山口さんは、千秋に感情移入しにくかったんですね。

山口：私は一平（主役・熱血リーダー）派なので、「やりたい」「い

ました。どっちもやっぱり正解なんだよね。

山口：私、新子の「負けてなんかいられない」というセリフが一番好き。ああいう子どもたちがいて、今も戦地にいる人たちがいて、命をかけて亡くなっている人も、残された人も、戦ってる兵士たちもいるし、自分がへこたれたり泣いてる暇はない。泣ける立場じゃないって思って。そういう時に「負けてなんかいられない」という言葉は、楽屋でも聞いてて、稽古でも聞いてて、本当にそうだと思います。

八敷：自分のシーンの中では、純也が帰ってきて「こんなことあったんだよ」って伝える。それでめっちゃめっちゃ悩んじゃって。同じ人間なのに、なんでこんなに環境が違えば苦しくなるんだって。僕は子どもができてから、考え方も、視点も変わりました。向こうで起っていることが日本であったとしたらどうなんだろうって、怖くなって。

山口：世の中に対して何かしなきゃいけないって心があるだけで、多分私はすごく変わりましたね。

——（JIM-NETのチョコ募金について）こんなチョコ売って何になるんですか？って一般的な疑問だと思うんですけど、皆さんはどういうふうに思いましたか？

八敷：一般の人がそう思ったりもすると思うんですけど、チョコ1個でも全然、違うっていうのはわかる。

山口：否定でも肯定でもないっていうのが一番怖いと思う

た。知らないだけっていうのが本当に。

八敷：確かに「何のためになるんですか」と言ってるほうがまだいい。こうだからって伝えられますから。

——最後にJIM-NET便りの読者に伝えたいことは。

八敷：見た方たちが、感銘を受けて（公演会場に置いたJIM-NETの）募金箱に募金されていくのが嬉しくて。何か大きなことをしようというわけじゃなくても、ちょっとでも伝われば、もっと大きくなるんじゃないかって思いましたね。1人1円募金すれば1億円集まるんですから。

山口：お芝居を観るとか、新聞を読む、本を読むことだったり、きっかけひとつだと思う。人って引かかるポイントが違ふと思いますけど、「こういうポストカードあるんだよ」と見せたら「あ、かわいい」「これ、子どもが描くんだね」と見たい。戦争だけに目を向けろって言っても実感がないと思うけど、いろんな発信を、自分も役者だからできたらな、と思うし、それをすべきて思います。

八敷：伝えるって大事ですね。戦争に関しても、次の世代に残していこう、伝えようとしている人がいっぱいいる。イラクのことにしても伝える人がいないと広まらないわけで、僕らも伝えるという職業ですが、もっと個人でも伝えることはできると思うんですよね。

——今日は長時間、ありがとうございました。

JIM-NET 夏期インターンを終えて

コロンビア大学メイルマン公衆衛生大学院 修士課程2年
青山利恵子



初めてJIM-NETさんを訪れたとき、私の心の中にあったのは、医学的に実践的なスキルを持たない私が役に立つのか、逆に足手まといで迷惑をお掛けしないだろうか、という不安と、同時にメディアを通じて何度も耳にした有名な団体の活動を間近で見ることでできる稀な機会に対する興奮でした。

しかし初めてご挨拶に訪れた際に、佐藤事務局長をはじめ、すべてのスタッフの方が温かく迎えて下さいました。また、海外事業ご担当の榎本さんも、イラクから帰国後、すぐに私の指導にあたって下さり、分からないことがあって何度も聞きにいったしまった時も、いつも笑顔で親切・ご丁寧にご指導下さいました。そして崔さん、芦澤さん、大牧さん、竹内さん、ボランティアで来ていらした山田さんたちは、緊張でガチガチになっていた私を、いつも楽しい会話で笑顔にさせて下さいました。特に皆さんが最初にWelcome Lunchに連れて行って下さったことが忘れられません。インターンという立場の私を、本当に心温かく迎えて下さいました。

2か月にわたるインターンの中でも、とりわけ印象に残っているのが、定期的に開催されるスタッフミーティングと、

佐藤さんが見せて下さったイラク現地の映像や写真、そしてイベントで知り合ったリカー先生との出会いです。緊急のミーティングでは、佐藤さんより、イラクの緊迫した状況についての情報が提供されました。また更に現地の映像、そしてリカー先生の講演を聞き、イラクから遠く離れたアメリカで知識だけ学び、それを今イラクで苦しんでいる子どもたちを救うためにすぐに応用できないでいる自分を情けなく感じました——ただ勉強しているだけではダメだ、現場で役にたつ応用力を身に着けないと、と実感し、今学期はコロンビア大で、可能な限り実践で役に立つスキルを学べる授業を取っています。

また、実際にイラクで小児がんで苦しんでいる子どもたちの写真や映像を見たことは、小児科医になる、という目標を改めてしっかりと感じ取る機会になりました。まだまだ一人前の医師になるには年月が必要ですが、必ず将来この子どもたちをJIM-NETさんの活動と一緒に救えるよう、努力していきたいと思います。

2か月もの間、本当にお世話になりました。至らないところも多かったと思いますが、今学期コロンビア大で学んだことを活かし、再び冬にインターンの続きをすることができれば、と思っております。それまで、遠いアメリカからJIM-NETさんの活動を応援していきたいと思います。ありがとうございました。

鎌田代表のつぶやき～「1%の力」

世界中が不安定な状態に、入り込みだしている。

2012年夏、ぼくはパレスチナのガザに入った。イスラエルとパレスチナの間では、66年間、殺し合いが行われてきた。イスラエルの兵隊に、パレスチナの12歳の少年が撃ち殺された。その少年の父親は、憎しみを横に置いて、脳死になった息子の心臓をイスラエルの難病の子どもに臓器提供した。12歳の女の子が、生き返ったのである。

ぼくは『アハマドくんのいのちのリレー』という本を日本で出版し、同時にその印税とおむつの会社アテントの応援で、ヘブライ語とアラビア語と英語の本をつくり、イスラエルとパレスチナを回って、その本をくばり、平和への第一歩にならないだろうかとディスカッションして歩いた。しかし、なかなか憎しみはとけない。この一ヵ月半の間に、2000人を超すガザの人びとが、イスラエルの空爆で殺された。

イラクでも、JIM-NETの拠点を置くアルビルから数十キロのモスルやカルクーシュが、スンニ派過激派集団のISISに制圧された。キリスト教徒を中心に、イスラム教以外の宗教に対し弾圧が行われ、約20万人の人びとが国内難民となった。それを見てアメリカはISISに対し、空爆を開始した。とんでもないことになってきた。

ぼくは『1%の力』(河出書房新社)という本を、9月18

日に出版した。1%は誰かのために生きてみよう、と、ぼくはこの数年言い続けてきた。国と国の関係も、そうである。日本と韓国と中国は、ぎすぎす、ひりひりした関係になっている。こんなときこそ、自分たちの国の考えを主張しながら、常に1%、相手の国のことを考えてみる。それが、戦争を起こさせないための最大の秘訣である。

1%には不思議な力がある。健康づくり運動を40年前に長野県に来て始めた。「100%生活習慣を変えましょう」って言えば、誰も、何もできなくなってしまう。「1%、あなたの生活習慣を変えてみませんか？」と言うと、それならやれる。その結果、長野県は男女共に平均寿命日本一の、健康な県になった。

1%の力を、ぼくは信じている。世界がこんなふうに危なくなってきたとき、1%、相手の身になって考えてみることで、これが大切だと思う。

JIM-NETは、これからもイラクの子どもたちの命を守りながら、世界が平和になっていくように、運動を続けていくつもりです。応援をよろしくお願いします。



小児がんのシリア難民
ラヤンちゃんとお母さん。



このほど、写真集「ARAB Bedouin of the Syrian Desert, Story of a Family」(イタリアの出版社より英語にて)を刊行しました。

15歳の時にアラビアのロレンスによってアラブに、沙漠に魅せられ心を奪われ、それらを自分なりに表現したいと言う想いで写真家を目指しました。私がシリアを初めて訪れたのは1987年。1995年からは毎年シリア沙漠に住む同じベドウィンの家族を訪ね、共に生活し撮影し続けています。その17年間の集大成がこの写真集です。279頁、カラー写真216枚、巻末に一族178人の家系図を掲載しています。

「沙漠は日本にあるのか？」とよく聞かれました。「ない」と答えると「それは良くない。沙漠は清潔で、ここにはすべてがある。」と誇らしげに言い切られます。町での便利な生活をするのも出来るのに、彼らは決して沙漠を出ようとしません。新しい物を買ひ、沢山の物を持っている事が生活を豊かにしていると思っている私たちとは相反します。電気も水道もなく、私たちよりはるかに少ない物しか持っていないが、相互扶助を実践し、年長者を敬ひ、慎み深く、自制心が強く、家族を愛し、思いやりに溢れ、心豊かに平和に満ち

シリア沙漠に生きる遊牧の民・ベドウィンに17年間にわたり撮影し続ける世界でただ一人の写真家

写真集『ARAB』世界同時出版 写真家・吉竹めぐみさん

た生活をしているベドウィン。

私を魅了して止まない沙漠、私の心の故郷、私の愛しい家族。この写真集を見終わった後、皆さんの心も温かく包まれましたら幸いです。(吉竹めぐみ)

◆「定価7,000円(税込み・送料無料)」。お求めは、洋書取

扱い書店、「吉竹めぐみ ARAB 写真事務局」(株式会社SDS)まで。WEBでお申込の場合(URL:<http://sdsjapan.net/>)、専用フォーマットお問い合わせフォームの「内容」欄に「写真集希望」と明記下さい。また「JIM-NET 便りを見て」とご記入頂けますと1冊につき500円がJIM-NETに難民支援募金として寄付されます。

【編集後記】今回の号から編集担当になりました。紙面構成について、ご意見よろしくお願ひいたします！(あ)

JIM-NET 便り 2014年9月号
発行：特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク
発行日：2014年9月30日
〒171-0033 東京都豊島区高田 3-10-24 第二大島ビル 303
info-jim@jim-net.net TEL/FAX 03-6228-0746

